

論文内容要旨

論文題名：回復期リハビリテーション病棟でのエンパワーメント尺度の開発～FIM との相関を踏まえて～

専攻領域名：昭和大学大学院保健医療学研究科
運動障害リハビリテーションと呼吸ケア領域

氏名：弓川 大地

【背景】回復期リハビリテーション病棟（以下回復期）では日常生活動作の指標である Functional Independence Measure（以下 FIM）の改善が重視されているが、FIM が高くても退院後の生活が困難との報告も散見される。自身の潜在能力に気づき、問題を解決していく力の獲得はエンパワーメントと定義され、生活上必要と考えられる。回復期を対象としたエンパワーメント測定の事例はほとんど見当たらず、本研究では回復期でのエンパワーメント尺度の開発と、項目分析、妥当性、信頼性、FIM との関係性を検証していくことを目的とする。

【方法】エンパワーメント尺度の先行研究から回復期に沿う項目を抽出し、日本語に翻訳した 17 項目の尺度を開発した。回復期入院患者 98 名を対象に測定した結果から、エンパワーメント尺度の項目分析と妥当性、信頼性を検証した。また、エンパワーメント尺度の得点と FIM の相関分析を行った。本研究は昭和大学保健医療学部倫理委員会（承認番号：406）、新横浜リハビリテーション病院倫理委員会（受付番号：0054）の承認を得ている。

【結果】項目分析で床効果を認めた項目もあるが、上位・下位分析では全項目で良好な判別力を示した。検証的因子分析でのいくつかの適合度指標と下位尺度と総得点の相関が良好であったことから、17 項目・5 つの下位尺度の構成で一定の構成概念妥当性が確認された。内的整合性と再検査信頼性は一部を除き良好な結果となった。エンパワーメント尺度の総得点・下位尺度と FIM との間の相関は、ほとんど相関を認めない結果となった。

【結論】床効果、因子適合度、内的整合性の改善には、選択肢の再検討、質問項目の修正・削除・追加を行い、より回復期に沿う内容とすることが今後の課題となったが、開発したエンパワーメント尺度は回復期を対象としたエンパワーメント尺度の構成概念に一定の妥当性があることが確認された。エンパワーメント尺度と FIM に関して相関をほとんど認めなかったことは、FIM とは異なる視点で対象者の能力を評価していることが考えられる。尺度として妥当性・信頼性が改善された上で、退院後の生活状況との関連性の評価、入院

期間での経時的変化の識別力の確認が今後必要となる。